

# アメリカにおけるナチス運動の軌跡

—「ドイツアメリカ民族同盟 *German American Volksbund*」の誕生から衰退まで—

長 友 雅 美

## 0. はじめに

国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP：以下「ナチス」と略）の勢力拡大とともに、多くのドイツ系アメリカ人たちが「親ナチス同調者 Pro-Nazi-Sympathizer」となっていった。だがその展開と結末はどうであったのか。憶説を交えた書籍が多い割にこの分野の学術研究は少ない。その理由は、研究に欠かせぬ原典資料の入手が困難なこと、さらに写真資料や図版に関してはインターネット上で目にすることは可能でも、その多くが好事家の収集対象物となり、特定市場にしか出回らないからである。その意味で、この分野はドイツ系アメリカ人の歴史の中で、最も扱い難い研究領域である<sup>1)</sup>。小稿の目的はドイツ系アメリカ人の特定政治団体である「ドイツアメリカ民族同盟 *German American Volksbund* (*Amerikadeutscher Volksbund* と呼ぶこともある)」「以下 GAV と略」の活動を中心に、その誕生から衰退までを時系列に論考することにある。

## 1. GAV 勢力の拡大

巨額の戦後賠償と世界大恐慌に伴う経済混乱により、ワイマール憲法下のドイツの社会状況は日増しに悪化していた。ヒトラー率いるナチス党は、失業者増大と社会不安の全てをユダヤ人と共産主義者に擦りつけ、偏見狂気の人種論に則り「アーリア人の血の浄化」を呼び始めていた。一方アメリカ合衆国では、景気浮揚と社会改革、国民の不安払拭のため、ルーズベルト政権が「全国復興局 *National Recovery Administration = NRA*」を新設、「ニューディール政策」を推し進めていた。だが実業家として財をなした一部富裕ユダヤ人に対する反感は熾り、ロシア革命による共産主義者の迫害を逃れた亡命者の増加も起因し、反ユダヤ主義（Anti-Semitism）と反共産主義の風潮はアメリカ国内にも渦巻いていた。こうした中、フリッツ・ギシブル（Fritz Gissibl: 1903 - ?）、弟ペーター（Peter Gissibl: 1900-1976）、さらにその賛同者ら<sup>2)</sup>が1924年10月12日、反ユダヤ・反共産主義を標榜し、ドイツのナチス党を範とする「自由トイトニア協会 *Free Society of Teutonia*：別名 *National Socialist League of Teutonia*」を、ドイツ系アメリカ人が比較的多く住むデトロイトに結成した。ヘンリー・フォード（Henry Ford: 1863 - 1947）がこの団体を初め、他の反ユダヤ主義活動団体に資金援助をしているとの風評が盛んに流れていたのはこの頃であった。<sup>3)</sup>

ドイツのナチス党本部の支援を得ていたこの組織は、1932年10月頃に「ヒトラー運動友の会 *The Friends of the Hitler Movement*」と名を変え<sup>4)</sup>、ナチス式挨拶「右手前斜挙げ」を導入、ニューヨーク、シンシナティ、ロサンゼルスなどに、ナチス党になぞらえて米国国内を幾つかの管区（*Gau*）に区分し、互いに団員確保を競わせながら活動強化を図っていった。ロサンゼルス市内に「西部管区」が設けられ、「管区長 *Gauleiter*」にハンブルク生まれのドイツ移民ヘルマン・シュヴァイン（Herman Max Schwinn: 1905-?）、「中西部管区」本部のミルウォーキーにジョージ・フロブーセ（George Frobose: 1900-1942）、ニューヨーク市内マンハッタン地区ヨークヴィレ<sup>5)</sup>の「中央管区」

にルドルフ・マークマン (Rudolf Markmann: 生没年不詳) が就任した。

翌 1933 年には、ナチス党副総統ルドルフ・ヘス (Rudolf W. R. Heß: 1894 - 1987) の特命を受けてアメリカに入国したハインツ・シュパンクネーベル (Heinz Spanknöbel: 1893-1947) がこの団体を改組、「新独友愛団 FONG = *Friends of the New Germany*<sup>6)</sup>」、1936 年には「ドイツアメリカ民族同盟 *German American Volksbund*」と名を変えながら団員数を急増させていった。その主たる活動目的は、ヒトラー政権支援、アメリカ国内のユダヤ人によるドイツ商品不買運動への対抗活動、反ナチズム勢力の減衰化、ヨーロッパで戦争へのアメリカ合衆国不介入などであった。<sup>7)</sup> また GAV の指導者は、国内に暮らす約 800 万人のドイツ系アメリカ人をナチス党支持の大勢力に組織替えし、同時にユダヤ人と共産主義者の影響からアメリカ文化を守ろうと夢みたのである。

1924 年から 1941 年までの間、この GAV の活動に陶酔したドイツ系アメリカ人の多くは、自らの「親ドイツ Pro-German」的感情を、一種の宗教にも似た「親ナチス Pro-Nazi」的崇拜感情へと変容させたのである。ただし 1930 年代のアメリカ合衆国には、ドイツ系アメリカ人によるこの GAV のみならず、イタリア系アメリカ人や亡命白系ロシア人によるものなど、約 120 近くの極左・極右集団が活動を続けていた。<sup>8)</sup> わけてもウィリアム・ペリー (William Dudley Pelley: 1890 - 1965)<sup>9)</sup> がノースカロライナ州アッシュェヴィレ *Asheville* に結団した「銀シャツ隊 *The Silver Shirt*」、イタリア系アメリカ人サルバトーレ・カリデイ (Salvatore Carid: 生没年不詳) がユニオンシティで結成した「黒シャツ隊 *The Blackshirts*」、ロシア人アナスターゼ・フォンシアツキー (Anastase Andreivitch Vonsiatsky: 1898 - 1965) による「汎ロシアファシスト団」<sup>10)</sup> などの活動は、チャールズ・カフリン神父 (Charles Edward Coughlin: 1891-1979) の極端な反ユダヤ人ラジオ説法と相まって、アメリカ国内に急速に反ユダヤ・反共産主義、ファシズム思想とナチス偏愛の危険な風潮を広めていった。こうした中、メキシコを経てアメリカに移住し、1934 年にアメリカ市民権を取得の後、デトロイトのフォード自動車会社に勤めていたミュンヘン生まれの技師フリッツ・クーン (Fritz Julius Kuhn: 1896 - 1951) が GAV に入会、1936 年頃には指導者として頭角を現していった。<sup>11)</sup>



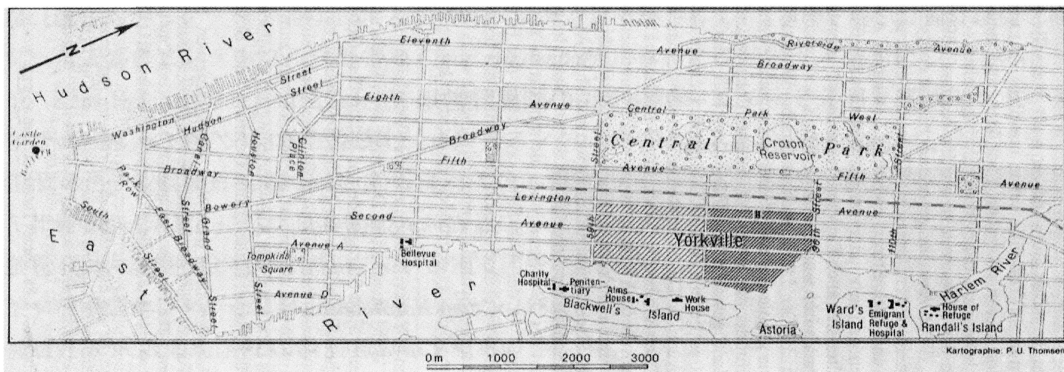
出処: [https://de.wikipedia.org/wiki/Fritz\\_Julius\\_Kuhn](https://de.wikipedia.org/wiki/Fritz_Julius_Kuhn)  
右から G・W・クンツェ、F・クーン、左は不明。

GAV は、ナチス思想啓蒙のためドイツ国内の様々な公的機関から援助を受けていた。わけでもシュトゥットガルトに本部を置く「ドイツ海外協会 *Deutsches Auslands Institut (DAI)*」は、重要な役割を果たしていたようである。また GVA は *Die Bruecke* (1933 年 3 月～同年 7 月)、*Die Deutsche Zeitung* (1933 年 7 月～翌年秋頃まで)、*Kämpfendes Deutschtum* (1933 年発刊、第 2 号で廃刊?)、*Deutscher Beobachter* (1934 年秋～1935 年 1 月まで)、*Deutscher Weckruf und Beobachter*

(1935 年から GVA 解散まで) などを購買方式で会員に配布、さらに反ユダヤ主義のカフリン神父、「反英国」的なアイルランド系アメリカ人、さらに共産主義革命のため亡命を余儀なくされニューヨーク市内に在住する「白色ロシア人」たちとも連携しながら、巧みな情宣活動を展開していった。<sup>12)</sup>

GAV の活動が最も盛んだったのは、当時ドイツ系アメリカ人多住地区の、「小ドイツ Littlel

Germany」のひとつ、ニューヨーク市マンハッタン島のヨークヴィレ Yorkville 地区【次図参照】<sup>13)</sup>である。



このヨークヴィレを起点に、ニュージャージー州のクリフトン Clifton、ハッケンサック Hackensack、ユニオンシティ Union City、フェアフィールド Fairfield、ノースバーゲン North Bergen、ニューアーク Newark などに支部が作られていた。1934 年代始め、GAV のニューヨーク管区は、収容席 1000 人の「クロイツアー会館 Kreuzer Halle」を集会場としていたが、団員増につれ客席 1800 の「ヨークヴィレ体育協会ホール Yorkville Turnhalle」や「ヨークヴィレ・カジノ Yorkville Casino」<sup>14)</sup>に、さらに客席 3000 の「セントラル歌劇場 Central Opera House」と集会場所を変えていった。またデトロイトでは「ヒトラーハイム Hitlerheim」、シカゴでは「帝国ホール Reichshalle」と呼ばれる建物がこの団体の集会所であった。<sup>15)</sup>

1933 年 10 月 6 日、フィラデルフィアのジャーマンタウン地区にあるフェルノン公園のパストリウス記念像の前で、「ドイツ移民 250 年記念式典」が開催された。この時、例年と異なり会場に目立ったのは、星条旗に混じり旗めく多くの「鍵十字の旗」であった。この式典の主催者は地元フィラデルフィアの体育協会や合唱協会、さらにペンシルベニアドイツ協会であったが、これに交じり、新興の GAV 関係者も姿を表したのである。<sup>16)</sup>

1934 年 8 月 7 日、GAV はニューヨーク市内マンハッタン地区のマディソン・スクウェアガーデン (Madison Square Garden) で「ヒンデンプルク記念式典」<sup>17)</sup>を開催、2 年後の 1936 年 6 月 23 日、ベルリン夏季オリンピック大会を契機に、団長クーンは GAV 執行部団員を伴い、ニューヨーク港を出港、ハンブルク、ヴィースバーデン、シュトゥットガルト、ミュンヘンの各都市を訪問後、8 月 2 日、総統官邸でヒトラー接見を非公式な形で得た。<sup>18)</sup> この「親ナチス同調者」の表敬訪問時に、クーンが手渡した GAV の記念本を見入るヒトラーのスナップ写真を、GAV は後日自分たちの機関紙の表紙として情宣活動に用いたのであった。

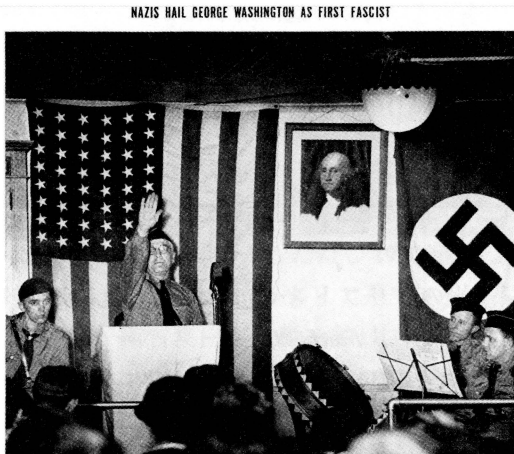


左図：1936 年 8 月 2 日、総統官邸でヒトラーと会見する団長 F・クーンら GAV 幹部一行<sup>19)</sup>

右図：会見時に、クーンが手渡した GAV 関係文書を目にする数枚のヒトラーの写真の一部を GAV は翌年、機関誌『戦うドイツ (魂) Kämpfendes Deutschtum』の 1937 年号の表紙に活用した。

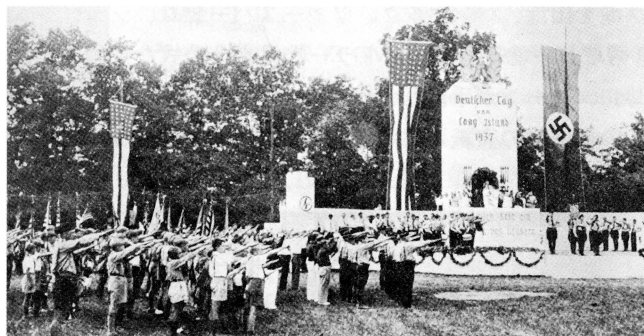
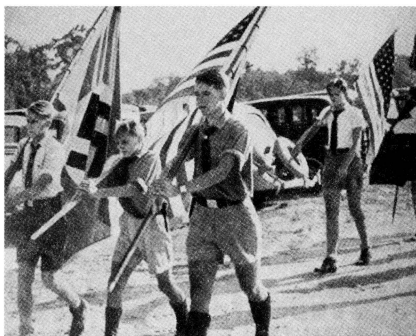
続いて1937年2月12日には、ニューヨーク市内の「ヒッポドロメ会館」<sup>20)</sup>で4000名規模の集会を、さらに同年10月30日にも「市民の大集会 *The Citizen's Monster Rally*」と称する集会を同じ会館で催したのである。

## 2. アメリカ版「ヒトラー・ユーゲント」の訓練野営地



1938年2月22日、ニュージャージー支部のGAV団員たちはハッケンサク Hackensackの某所に集い、鉤十字のそばにワシントンの肖像を掛けた。写真出処：The Life, 1938, March, 7th. Vol.4. No.10.,p.17.

ニューヨーク州ロングアイランド、ヤップハンク *Yaphank* のジークフリート野営地 *Camp Siegfried*、ニュージャージー州アンドヴァー *Andover* のノルトランド野営地 *Camp Nordland*、ペンシルベニア州クロイドン *Croydon* 近郊のドイチュホルスト野営地 *Camp Deutschorst*、ミシガン州ブリッジマン *Bridgeman* のフォン・シュトイベン野営地 *Camp von Steuben*、ミシガン州デトロイト *Detroit* のエフデンデ野営地 *Camp Efdende*、ウィスコンシン州グラフトン *Grafton* 近郊のヒンデンブルク野営地 *Camp Hindenburg*、カリフォルニア州サンベルナルディオのサンベルナルディオ野営地 *Camp San.Bernardio* など<sup>21)</sup>を含む全米24箇所の野営地で、ドイツ系アメリカ人子弟によるアメリカ版「ヒトラー・ユーゲント」結成のため、GAVは徹底的なナチス思想教化を図りこれを実行していった。GAV団員の子弟を、少年は8歳～13歳を「ユーゲントfolk *Jugendvolk*」、14歳～17歳を「ユーゲントシャフト *Jugendenschaft*」、少女は、8歳～12歳を「ユーゲントメーデルシャフト *Jugendmaedelschaft*」、13歳～16歳を「メーデルシェンシャフト *Maedelsenschaft*」、17歳～21歳を「メーデルシャフト *Maedelschaft*」と区分し、<sup>22)</sup>朝6時30分の起床から21時30分の消灯就寝まで規律正しい集団生活をさせ、清掃、体操と行進、合唱、ヒトラーの著作『わが闘争 *Mein Kampf*』の通読とドイツ語使用を義務化、ナチス党の精神教化とドイツ文化の優位性を叩き込もうとした。<sup>23)</sup>



左：ニューヨーク州、ロングアイランド、ヤップハンクの「ジークフリート野営地 *Camp Siegfried*」でアメリカ国旗とナチス党旗【重なって見えないがGAV団旗】を背負い男子児童らが行進する様子。【写真出処：Illustrierte Zeitung (Leipzig, J.J.Weber Verlag) Nr.4775, September 1936. Bildbericht der Woche. S.370.】右写真出処：Oscar Handlin: America. A History. Holt Rinehart & Winston Inc. 1968, p.1002. これは1937年8月29日、同じヤップハンク野営地でGAVが開催した「ドイツの日」の記念式典の様子。式典壇上右にドイツ語で *Deutscher Tag von Long Island 1937* 「ロングアイランドのドイツの日1937年」と記されている。参加者はナチス式の敬礼を25000人も参加者がナチス式の挨拶「ジーク・ハイル *Sieg Heil!*」を響かせた。

GAV はアメリカ西部でも盛んな活動を展開、サフランシスコ地区のドイツ系アメリカ人たちの各種団体がそれまでは親睦の場としていた「ドイツの家 *Das Deutsches Haus*」と呼ばれる建物【現在もポークターク通り Polk & Turk Str. にある】を拠点にした。1937年8月8日、バファロー市近郊のヒンデンブルク野営地 *Camp Hindenburg* には、時の駐米ドイツ大使ディークホッフ (Hans-Heinrich Dieckhoff:1884 -1952) が GAV の活動を視察、このときアメリカ国旗と「鍵十字 Swastika」のナチス党旗を持った「オールドヌング・ディーンスト *Ordnungsdienst*」と呼ばれる GAV の男子正規団員 1000 名が、特設演壇上から見守る団長クーンの前を行進していった。<sup>24)</sup> さらに同年9月12日には、ロサンゼルス周辺居住のドイツ系アメリカ人たちが「ドイツ人の日」を祝い、大規模集會をヒンデルブルク公園で開催した。来賓として参加していたロサンゼルスドイツ総領事キリングー (Manfred von Killinger:1886-1944) は、慣例に従い総領事として祝辞を述べ始めたが、この地区の GAV 幹部を労う感謝の辞に達した時、上空旋回の飛行機から「アジビラ」が撒かれたのである。これはこの外交官が、ナチス黨員として、バルト三国のひとつ、ラトビアの港町リガで暗躍したことを暴露するピラであった。<sup>25)</sup>

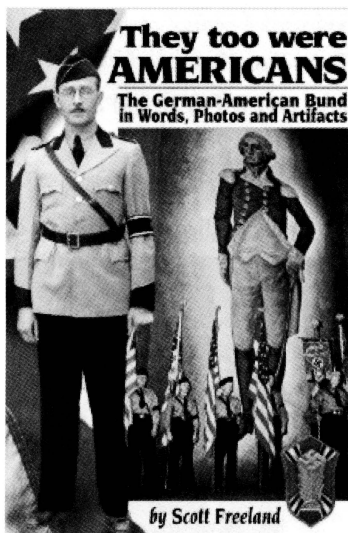
1938年3月13日、ヒトラーはオーストリアを併合、同年11月の9日から10日にかけて、ナチ黨員がドイツ国内で 500 以上ものユダヤ教会を焼き討ちし、ユダヤ人の店を襲撃・略奪する「ライヒス・クリスタル・ナハト「帝国水晶の夜」一蛮行に出た。その後、数千のユダヤ人たちが反政府派の人びとは (反ナチズムの人びとや共産主義者、自由主義者など) とともにマイダネック、ダッハウ、トリブリンカ、オラーニエンブルグ、ブーヘンヴァルト等の強制労働収容所へと移送され、偏狭な「人種論」に基づくユダヤ人虐殺準備も着々と進められていった。この知らせは、全米各地に怒りの声として拡大、大統領ルーズベルト (Franklin D.Roosevelt: 1882-1945) を動かし、アメリカ政府はドイツ駐在合衆国大使を召還させドイツナチス政府に抗議したのであった。

### 3. マディソン・スクウェアガーデンでの大集會

1939年2月20日、GAV は「ワシントンの誕生記念祝典」と銘打った大集會を、ニューヨーク市内のマディソン・スクウェアガーデンで開催した。<sup>26)</sup> 「汎ロシアファシスト団」団長フォンシアツキーも招待客として同席した2万人にも及ぶこの大会で、新しい力を誇示すべくナチス式挨拶「ジーク・ハイル *Sieg Hail!*」が鳴り響いたのであった。このような大規模な政治集會はその後各地で開催された。<sup>27)</sup>



左：マディソン・スクウェアガーデンの大集會への参加を呼びかけるポスター<sup>28)</sup> 中・右：【マディソン・スクウェアガーデンでのワシントン・デー記念式典の写真】<sup>29)</sup> 舞台正面には約9mのワシントン将軍の絵が掲げられ、その左右には「鍵十字」を有す GAV の旗布が合衆国国旗とともに下げられている。



S・フリーランドの著書 *They too were Americans*<sup>32)</sup> の表紙。この本には、多くの GAV 関係写真が掲載されているが、そのほとんどが「個人的な収集」であるため論文や他の出版物への掲載は不可能。

(Franklin Delano Roosevelt) 大統領のことをドイツ風に「フランク・D・ローゼンフェルト *Frank D. Rosenfeld*」と敬称抜きに呼び捨て、さらに彼の提唱する「ニューディール *New Deal*」政策を「ジューディール *Jew Deal* (ユダヤ人の取引)」と皮肉ったのは有名である。

夜8時に始まった集会は、GAVの制服に身を包んだ3000名の男子正団員(Ordnungs-Dienst)が見守るなか、歌手マーゲリータ・リッターハウス(Margareter Ritterhaus: 生没年不詳)の『星条旗よ永遠なれ』独唱の後、ドイツ国歌とナチス党歌『ホルスト・ヴェッセルの歌 *Horstwessellied*』が唱和され、大会式次第進行役のジェイムズ・ウィラーヒル(James Wheeler-Hill: 1905-?)に紹介されたルター派のボッセ(Sigismund von Bosse: 1862-1943) 牧師<sup>30)</sup>が開催の祈りを捧げた。<sup>31)</sup>『親愛なるわがキリスト信者のアメリカ人たちよ! GAVの支援を得たこの劇的な愛国的大規模示威集会に私が招待されたことは光栄なことである。』と高らかにGAV中央管区総書記J・ウィラーヒルが開会祝辞を読み上げ、その後、東部管区長R・マークマン(Rudolf Markmann: 生没年不詳)の「同盟存在のための根拠 *Reasons for the Bund's Existence*」と題する演説<sup>33)</sup>に始まり、中西部管区長のG・フロベゼ【前出】とG・クンツェ(Gerhard Wilhelm Kunze: 1906-?)の演説が続き、最後は団長F・クーンが締めくくった。この時クーンがこの集会で、ルーズベルト

#### 4. 衰退へ向かい始めた GAV

1936年、団長クーンとGAVの幹部たちが、ベルリンで総統ヒトラーとの面会の機会を得たとき、アメリカとの外交関係を配慮するヒトラーは冷ややかで、GAVの活動に対し特別の財政的支援に踏み切ることにはなかった。GAVの活動が活発になるやこの団体に反発する人々と一緒に第一次世界大戦に従軍経験のあるユダヤ系(アメリカ人)退役軍人とGAV会員との間で度々衝突事件が発生した。GAVは州議会や連邦議会に団員を議員として送り込むといった政治活動は行わなかったが、この団体がドイツ系移民とドイツ系アメリカ人によって組織されていたことが、一般アメリカ国民にとっては不安脅威の種で、第一次世界大戦中の「反ドイツ感情」<sup>34)</sup>をわずかながらも再び刺激する結果となったようである。この「反ドイツ感情」による極端な暴力事件が生まれることもなく、各地のドイツ系アメリカ人は「合唱協会 *Gesangverein*」や「体育協会 *Turnverein*」でその活動をそのまま続けていたのがこの時代である。

司法省はすでに1934年頃から、他の政治組織も含めGAV団員活動を内偵していた。ルーズベルト大統領は国内の極右極左の政治団体などを調査する「非アメリカ的活動団体 *The House UnAmerican Activities Committee =HUAC*」調査委員会を1938年に強化再発足させた。テキサス州選出の民主党下院議員マーティン・ディース(Martin Dies Jr.: 1870-1922)委員長の下、GAVがナチス政権と関与する様々な証拠がこの「ディース委員会 *Dies-Committee*」で報告審議されていった。

マディソン・スクウェアガーデンでの大集会からほぼ3ヶ月後の1939年5月25日、GAV党首クーンは、脱税と同組織活動資金横領容疑でニューヨーク大陪審に告訴され、ペンシルベニア州パークス郡のアレンタウン市近郊クラムズビル *Krumsville* で逮捕された【*The New York Times*



衰退の影が見え始めたが、1939年10月30日、ニューヨークのマンハッタン区のヨークヴィレ（東86番通り）付近を楽隊とともに行進するGAV団員。  
写真出処：LC-USZ62-117148 (b&w film copy neg.)

では、翌日5月26日付の紙面に約15,000 [正確には14,548ドル]ドルの使い込みとある<sup>35)</sup>。これはGAVを解体へと導くために「デイス委員会」が編み出した苦肉の策で、別件逮捕でもあった。クーンの逮捕後、数百人のGAV団員たちはドイツへ逃れたと伝えられているが定かではない。

クーンは、12月5日に執行猶予付きの禁錮刑5年の判決を受け、1943年6月21日に「敵性不穏分子」として再逮捕、テキサス州のクリスタル・シティ収容所やケネディ収容所などを転々とした<sup>36)</sup>。クーン自身はその後1945年9月にアメリカ市民権を剥奪され、他の数百名の「不法分子」とともに本国送還

処分となり、1945年9月29日占領軍駐留中のドイツ連邦政府に引き渡され、1948年4月20日、ミュンヘンの「脱ナチス法廷 *Denazification trial*」で本人不在のまま労働刑10年が宣告され、ダッハウ刑務所に収監、後に減刑され1949年2月22日に釈放、1951年12月14日、55歳で死亡した<sup>37)</sup>。

1940年9月5日、クーンの後継指導者となったクンツェ (Gerhard Wilhelm Kunze: 1906- ?)<sup>38)</sup>は、数ヵ月後にグスタフ・エルマー (Gustav Elmer: 生没年不詳) とともに不穏分子として密告され、メキシコで捕らえられて取調べを受け、他の24名のGAV執行部団員らも1940年の「選抜徴兵法 *Selective Service Act*」違反で逮捕された。その後クンツェは、1942年8月24日に「破壊活動」のために禁固刑15年を宣告され刑に服した<sup>39)</sup>。

その後のGAVの動きはあまり知られていない。1939年6月7日にニューヨーク市ブルックリン地区【4番街227番地】のリュセチエウム Brooklyn Lyceum<sup>40)</sup>にて「忠誠集会 *Loyalty Day Rally*」が開催されたが、1941年7月26日と27日の600名ほどのGAV団員参加によるキャンプ・ジークフリート集会在最後のようで、そのときには歌声もナチス式挨拶 *Sieg Heil!*<sup>ジークハイル</sup>もなく、畑を耕すトラクターの音が響いていたという<sup>41)</sup>。GAVの団員は、ニューヨーク市内のヨークヴィレ、またミルウォーキーやシカゴではドイツ系アメリカ人が出入りするピヤホールで会合を開いていたようである。だが相次ぐ幹部逮捕でGAVは急速に力を失い、ルーズベルト政権がこの組織を違法集団と認定したことで、ほとんどの地区で解散に追い込まれ姿を消したのである<sup>42)</sup>。

ヒトラー率いるドイツ政府とムッソリーニのイタリア政権が、1941年12月11日、すなわち日本の真珠湾奇襲攻撃の3日後、アメリカに対し宣戦布告をし、それに対し翌12日、ルーズベルト大統領は合衆国議会両院からの決議書 (Joint Resolution of December 12, 1941, Public Law 77-331, 55 STAT 796) に署名、ここにアメリカ合衆国は先の大戦と同様、ドイツと戦うことになった。

ドイツ系アメリカ人がアメリカ合衆国に忠誠を誓ったのは言うまでもない。ドイツ系アメリカ人の子孫アイゼンハウアー (Dwight D. Eisenhower: 1890 - 1969) 将軍の指揮下、数多くのドイツ系アメリカ人がノルマンディーに上陸しベルリン陥落まで彼らの祖先の地で戦ったのである。ただしアメリカ陸軍内に、日系アメリカ人による「第442連隊 *The 442nd Regiment*」が組織されたのに反し、ドイツ系アメリカ人部隊が組織されることはなかった。

アメリカ合衆国の指導者層には、偉大な精神文化を築きまたアメリカ合衆国にも大きな影響を及ぼしてきたドイツに対する嫌悪感を表面化させるというよりも、独裁者アドルフ・ヒトラーに率いられたナチス・ドイツの壊滅こそがアメリカ合衆国の主務と考えていたのである。

## 5. GAVの動きに警鐘を鳴らした人々とハリウッド映画界の反ナチ運動

時系列的には話が前後するが、このGAVの活動に反対する勢力がドイツ系アメリカ人、それもとくにドイツ系ユダヤ人たちのなかにいたことを述べておく必要がある。

すでに1933年5月7日、社会的に影響力を有す資産家とユダヤ系の人々の音頭により、すべてのドイツ製品に対する不買運動が始まり、同月10日には反ナチズムのデモ行進がニューヨーク市内で行われ、さらに1933年3月27日には、同市内のマディソン・スクウェアガーデンで、ヒトラー政権を非難する大抗議集会在開催された。<sup>43)</sup>

GAVの動きに危機感を抱き警鐘をならす人々の中でも、ゲルハルト・ゼーガー (Gerhart H. Segar: 1896-1967)<sup>44)</sup>、シュテファン・ハイム (Stefan Heym: 1913-2001)<sup>45)</sup> マンフレット・ゲオルゲ (Manfred George: 1893-1965) の3人の新聞人たちは、それぞれ自身が編集に従事するドイツ語新聞で、果敢に筆を執り「反ナチズム」を訴えていった。

ハイムは週刊新聞「ドイツの響き Deutsches Echo」を通じ、欧州ファシズムの動向、スペイン内戦の「ペロニカの空爆」を伝え、さらにGAVの動きに警鐘を鳴らす報道を活発に展開していった。また、ゼーガーは「ドイツ労働者代議員団 Die German Labour Delegation (GLD)」のメンバーのひとつりとして尽力し、この団体発行の週刊新聞(発刊当初しばらくは日刊紙)「ノイエ・フォルクスツァイトゥング Neue Volkszeitung」の主筆として筆力を発揮した。さらにゲオルゲは、「ニューヨーク・ドイツユダヤ協会 The German-Jewish Club of New York」による「アウフバウ Aufbau」紙【1934年12月1日より発行を開始したドイツ語新聞】を通じ、国内のドイツ系ユダヤ人も含むドイツ系アメリカ人がすべて「ヒトラー政権」と一心同体ではないことを世論に訴えるだけでなく、合衆国に忠誠を誓いアメリカ市民権を有すドイツ系アメリカ人の「良心的な叫び」も代弁したのである。とくに「アウフバウ」紙は、亡命中の多くのドイツ人知識人——エーリッヒ・レマルク (Erich

右:ハイムが編集する Deutsches Volks Echo 1937年10月16日の第2面に掲載のS.ハイム自身の15分間のラジオ放送予告。<sup>46)</sup>

**Achtung, Radiohörer!**

Am Donnerstag, den 14. Oktober  
6:00 - 6:15 P. M.  
spricht **STEFAN HEYM**  
Chef-Redakteur des Volks Echo  
auf Station **WQXR** (1550 Kilocycles)  
über  
**"Nazi Activities in USA"**  
(Englisch)



G・H・ゼーガー<sup>47)</sup>



S・ハイム<sup>48)</sup>



M・ゲオルゲ<sup>49)</sup>

**Massenversammlung  
GEGEN DEN FASCHISMUS**

zum vierten Jahrestag des REICHSTAGSBRANDES  
**SONNTAG, den 28. Februar, abends 7.30 Uhr**  
**IM YORKVILLE CASINO**  
210 East 86th Street, N. Y. C.  
Redner:

**Dr. RUDOLF BRANDL**  
*Vertreter des Deutschamerik. Kulturbundes*

**TONI SENDER**  
*frühere SPD-Reichstagsabgeordnete*

**ARTHUR GARFIELD HAYS**  
*bekannter Rechtsanwalt*

**Rev. HERMANN F. REISSIG**  
*Exekutiv-Sekretär des Nordamerikanischen Komitees für die Hilfe der spanischen Demokratie*

**Dr. KURT ROSENFELD**  
*früheres Md.R. und preussischer Justizminister*

**Rev. JAY T. WRIGHT, Vorsitzender**  
*Direktor der Civil Liberties Union, New Jersey*

ニューヨーク市内マンハッタンの「ヨークヴィレ・カジノ競技場」で、1937年2月28日に開催の「反ファシズム大集会」参加を呼び掛ける新聞広告<sup>50)</sup>

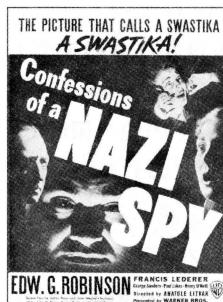


Maria Remarque: 1898-1970)、トーマス・マン (Paul Thomas Mann:1875 -1955) など—の寄稿文を掲載し、反ナチス・反ヒトラーの論調を強めていった。

また 1919 年に創立され、ドイツ系アメリカ人の間で大きな影響力を有すシュトイベン協会 (The Steuben Society of America) ——この組織も 1933 年にはマディソン・スクウェアガーデンでドイツ系移民 250 年祭を開いた<sup>51)</sup> ——も 1938 年 8 月には反ファシズムの立場を明らかにしていったのである。もちろんこのドイツ系アメリカ人の組織のみならず、アメリカのユダヤ人協議会が呼びかけた大規模な「反ナチス」抗議集会が再び全米各地で開催された。わけても 1937 年 3 月 15 日、23000 人が参集したと伝えられているマディソン・スクウェアガーデンでの「反ナチス大集会」は有名である。

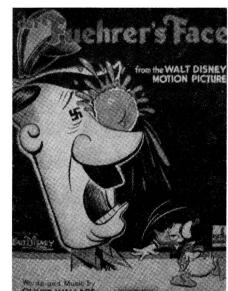
1936 年 7 月に誕生した「ハリウッド反ナチ連盟 (Hollywood Anti-Nazi League for the Defense of American Democracy) HANL」<sup>52)</sup> に歩調を合わせ、著名な監督・俳優たちは、反ナチズムの大規模な集会を同年 10 月 20 日頃から開催し、また 1939 年 4 月 28 日にはハリウッドの映画業界も他の報道機関と共に、ナチズムの非人道的政策の徹底糾弾と反ファシズム運動のため<sup>53)</sup>、映画製作のみならずラジオ番組や他の宣伝媒体にもその豊富な人的資源と技術を活用していった。こうして「反ナチス」の立場を明確し出したハリウッド映画界は、次のような作品を次々と生み出していくのである。

実際に起きた事件に基づく『ナチ・スパイの自白 *Confessions of a Nazi Spy*』<sup>54)</sup> (1938 年 4 月：ワーナー・ブラザーズ映画社)、チャップリン (Charles Spencer Chaplin: 1889-1977) の『(偉大な)独裁者 *The Great Dictator*』<sup>55)</sup> (1940 年 10 月 15 日封切り：UAL (United Artists Entertainment 社)、ベルリン生まれのエルンスト・ルビッチ (Ernst Lubitsch: 1892-1947) 監督の『生か死か *Sein oder Nichtsein*』(1942 年)、また 1942 年から 1943 年にかけては、ディズニー<sup>56)</sup> の短編アニメ映画『その戦車を止めろ *Stop that Tank!*』と『総統の顔 *Der Führer's Face*』<sup>57)</sup> が、そして 1944 年には、



左：『あるナチ・スパイの自白 *Confessions of a Nazi Spy*』<sup>58)</sup>

右：皮肉を込めヒトラー政権を描いた『生か死か „Sein oder Nichtsein”』。この映画は、戦争前にアメリカ合衆国のナチ・スパイ組織を実際に内偵調査していた前 FBI 捜査官レオン・G・トゥルー (Leon G. Turrour: 生没年不詳) がまとめた記事に基づく。



左：監督・製作・脚本・主演をすべて一人で務めたチャップリンの『(偉大な)独裁者 *The Great Dictator*』

写真出処：[http://www.moviemail.com/images/large/great\\_dictator3\\_rgb.jpg](http://www.moviemail.com/images/large/great_dictator3_rgb.jpg) より。中：1942 年封切りのディズニーの『その戦車を止めろ *Stop that tank!*』出処：Carsten Laqua: *Wie Micky unter die Nazi fiel. Walt Disney und Deutschland.*, Hamburg, Rowohlt, 1992. S.166. 右：1943 年製作のディズニーの『総統の顔 *Der Fuehrer's Face*』このアニメ映画の原作名は「ナチ国の Donald *Donald Duck in Nutziland*」出処：Carsten Laqua: 書 S.176。

ユナイテッド・アーティスト・エンターテインメント (United Artists Entertainment) 社の『明日は世界を *Tomorrow, the World*』などである。

## 6. 結論にかえて

第一次世界大戦前後のような極端な「反ドイツ感情」が全米中を吹き荒れることはなかったものの、ドイツ本国のナチス党、あるいはヒトラー政権に忠誠を誓うことと、ドイツ系アメリカ人の「民族意識」と素朴な「祖国への思慕」を高揚させることとは全く異質の事であり、GAVの活動は、この点を意図的に誤魔化し、特定民族集団として「ドイツ系アメリカ人」という存在意識を高揚させようとしたことは、セオドア・ルーズベルト (Theodore Roosevelt: 1858-1919) が警鐘をならした「ハイフォン付アメリカ人 Hyphenated American」<sup>59)</sup> 問題を浮き上がらせてしまったのである。

数千名もいた GAV の団員たち<sup>60)</sup> がその後どのような状況に追い込まれ、親ナチ感情をどのように清算していったのか、ドイツ系アメリカ人の歴史のなかでは未だヴェールに包まれており、今後もおそらくあまり明らかになることはないであろう。GAV の活動は歴史的事実である。しかしながら、ドイツ系アメリカ人にとっても、また、ナチズム的な運動をある意味で容認したアメリカの歴史のなかでも、それは理解不能な矛盾であると同時に忌まわしい事実であることは確かである。

繰り返すが、特定民族の文化維持とその存立の証明を強調すると、必ずそこには反発が起こる。自己存立の証明を何らかの形で発露することは必要であり、悪しきことではない。だが、ナチズムに共感しあるいはこれと連帯し、そのいわば分身を作っていた GAV は、ドイツ系アメリカ人の歴史のなかの「影の部分」であることに間違いはない。

アメリカ合衆国は「無限の自由を求め」、自己責任で自らの夢を叶えることが可能な、移住多民族と土着民族により成り立つ国家である。この多民族複合国家の中で、GAV はその大多数を占めるドイツ系アメリカ人を、ファシズム思想で大同団結させようとした。1939年2月のマディソン・スクウェア・ガーデンにおける大規模集会を始め、各地野営地での GAV 集会に多くのドイツ系アメリカ人の賛同者が押し寄せた。その一方、経済・産業界、宗教・教育・その他の領域で、アメリカ文化を牽引してきた多くの影響力を持つドイツ系アメリカ人たちが、この GAV の誕生から消滅(?) まで、どのような態度をとっていたのかは定かではない。これを調べるには、当時発行されていた新聞やドイツ系アメリカ人の各種の団体——例えば、ドイツ系アメリカ人が集う各地の「合唱協会 *Liederkrantz*」、「体育協会 *Turnerverein*」、あるいは、小稿ではその名だけをあげた「シュトイベン協会」以外の「カール・シュルツ記念財団 *Carl Schurz Memorial Foundation* (略称 *CSMF*)」<sup>61)</sup>、「アメリカドイツ語教員協会 *The American Association of Teachers of German* (*AATG*)」<sup>62)</sup>——発行の出版物を GAV に関する記事中心に分析検証する必要がある。ただし小稿冒頭でも断ったとおり、この分野の資料収集が極めて困難であることを再度ここに触れておく。これは、現在も活動を続けるネオナチ集団を含む極右勢力の拡大を懸念する米国司法当局の安全配慮に起因するのかも知れない。

## 注

- 1 アメリカ合衆国ではこの分野の文献収集や資料調査には制限があり、この組織のかつての出版物—*Deutscher Weckruf*紙や *Beobachter* 紙など—の資料入手は困難である。「ネオナチ運動」に対してはアメリカ合衆国もドイツ連邦共和国と同様、関係当局は厳しく目を光らせている。アメリカ合衆国入国に際し着陸前に航空機内で配布されていた合衆国移民局の緑色の「入国申請カード」【「I-94W 査証免除・到着出発記録」—「渡航前電子認証システム I-94W」の義務化で使用されなくなった—には、ナチスに関係しているか否かをチェック質問事項がある。少し長いのが、ここに「はい」・「いいえ」ので回答するこの質問C項を引用する。：C. 「あなたは、スパイ行為もしくは破壊工作、テロ活動、あるいは民族大量虐殺に、過去に関与したことがありますか？ または現在関与していますか？または、1933年から1945年までの間に、ナチス・ドイツまたはその同盟国に関連した迫害に何らかのかたちで関与しましたか？」
- 2 Carl A. Sokoll: *The German-American Bund as a model for American Fascism: 1924-1946*. Ph-Diss., Columbia University 1974, p.23. 【Ann Arbor, Mich., UMI Dissertaion Services】ならびに Susan Canedy Clark: *America's Nazis. The German American Bund*. Ph.Diss., Texas A & M University 【Ann Arbor, Mich., UMI Dissertaion Services】, 1987, p.43. Cornelia Whilhelm: *Bewegung oder Verein? Nationalsozialistische Volkstumspolitik in den USA*. Stuttgart: Franz Steiner, 1998. S.41. 後者の2著にはギジブル兄弟の他 Alfred Ex (生没年不詳)、それに元ドイツのナチス党ミュンヘン地区「突撃隊 SA」隊長 Joseph Schuster (1904- ?)、Frank von Friedersdorff (生没年不詳) の名も記されている。
- 3 1930年代から組み立てラインにベルトコンベアーを導入し大量生産を可能とした H・フォードは、1938年6月30日、ドイツのケルン市北部にも自動車制作工場を立て“Made in Cologne”のブランドで大型トラック製造を始めていた。この風評はヒトラーもその著『我が闘争』のなかで賛美した「反ユダヤ思想」をフォードが表明したことによる。また1938年7月、75歳の誕生日にフォードが、ナチス政権から「ドイツ鷲大十字勲章 Großkreuz des Deutschen Adlerordens」を授与された事実は、この風評をいっそう強くした。
- 4 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.28. には、1932年1月、「トイトニア協会」会員の一部がナチス党に入会したために解散を余儀なくされ、残りの会員がヒトラー運動友の会 *The Friends of the Hitler Movement*」を結成したとある。
- 5 Richard Goldstein: *Helluva Town. The Story of New York City during World Wat II*. Free Press, NY, London, et.al., 2010, P.208 には「東 178 番 85 番通り 178East 85th, Street」とある。
- 6 ドイツ名：*Bund der Freunde des Neuen Deutschland*
- 7 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.43.
- 8 Donald S. Strong: *Organized anti-Semitism in America; the rise of group prejudice during the decade 1930-40*. Washington D.C., American Council on Public Affairs 1941, p.138f.
- 9 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.98ff. メソジスト派牧師の息子としてマサチューセッツ州のリン Lynn 生まれのウィリアム・ペリーは、新聞記者としてシベリアで働いた経験を持つ。ユダヤ人に支援された共産主義からアメリカ市民を救済する目的で、隊服は、ヒトラーの突撃隊服を模し、ペリー自身が「銀シャツ隊 *Silvershirts*」と命名した。危険人物として告訴され禁錮15年の刑(1942-1950年)に服し1965年7月1日、75歳で死亡。
- 10 コネチカット州のプトナム *Putnam* で結成。この組織は「ロシア国民革命党 *The Russian National Revolutionary Party*」とも呼ばれた。フォンシアツキーは危険人物として1942年に逮捕された。
- 11 James E(dward) Geels: *The German-American Bund: Fifth Column or Deuschtum?* MA Thesis of the North Texasa University 1975. (UMI Dissertation Services). p.58.
- 12 これらの関係文書はその保存先が明らかではあるが、現在でも「ネオナチ運動」を懸念するアメリカ合衆国では、その複写ですらきわめて入手困難である。
- 13 図版出处：Agnes Bretting: *Deutsche Siedlungsviertel in New York City, 1830-1930*. In: Michael Just/Agnes Bretting/Hartmut Bickelmann: *Auswanderung und Schifffahrtsinteressen „Little Germanies” in New York Deuschamerikanische Gesellschaften*. Stuttgart: Franz Steiner, 1992., S.75. 現在は高級コンドミニアムが林立する閑静な場所。「小ドイツ」と呼ばれたドイツ系アメリカ人と市民権申請中のドイツ系移民が多く住む地区は、この「ヨークヴィレ」以外にも「ローア・イースト・サイド地区」にも形成されていた。だが、第一次世界大戦終了後、この「ローア・イースト・サイド地区」のドイツ系アメリカ人はいなくなってしまう、「ヨークヴィレ」か、隣のブラウンスヴィレ *Brownsville* やブルックリン *Brooklyn* 地区に移り住んでいった。
- 14 「ヨークヴィレ体育協会会堂 *The Yorkville Turn Hall*」: ニューヨークのマンハッタン地区ヨークヴィレ (*Yorkville*: 東 85 番レキシントン街) にかつて存在した体育家協会の建物。「ヨークヴィレ・カジノ *Yorkville Casino*」: ニュー

ヨークマンハッタン地区 210 東 86 番通りに 1912 年頃から存在していた約 2500 名席を持つ劇場。現在は「東 86 番通り映画館」となっている。

- 15 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.54.
- 16 この 250 周年式典には、ドイツ本国からヒンデンブルク大統領とナチス党党首のヒトラーから祝電が届いたという。
- 17 この式典の正式名称は「ヒンデンブルク記念式典・新生ドイツの友人・『忠誠は榮譽の力』Hindenburg Gedenkfeier: Freunde des Neuen Deutschland „Die Treue ist das Macht der Ehre”」であった。
- 18 Arnie Bernstein: *Swastika Nation Fritz Kuhn and die Rise and Fall of the German-American Bund*. New York; St.Martinßs Press,2013.S.63. この本にはフロベゼ George Froboese、アルント Karl Arndt、マークマン Rudolf Markmann、ヴァイラー Karl Weiker らと表敬訪問と記されている。また Marvin D.Miller: *Wunderlich's Salute. The interrelationship of the German-American Bund. Camp Siegfried, Yaphank, Long Island, and the Young Siegfrieds and their relationship with American and Nazi institutions*. Malamud-Rose, Publishers, 1983 の 19 頁にはクーンの他 4 名の随行団員の名が記されているが、詳細な説明はない。
- 19 写真出処: <http://www.warrelies.eu/forum/photos-papers-propaganda-third-reich/hitler-postcard-help-216826/> 同じ写真は Scott Freeland: *They too were Ammericans. The German-American Bund in Words, Photos and Artifacts*.San Jodse, Ca: R.James Bender Publishing, 2001.P.47. にも掲載されている。Sander A.Diamond:*Zur Typologie der amerikadeutschen NS-Bewegung*. In: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* . Jahrg.23., H,,1975.S.285. は、このヒトラーとの面会を次の様に記している。„Man schrieb den 2.August 1936. Nach dem Marsch wurden Kuhn und vier seiner Untergebenen in die Reichskanzrei zu einem offenbar ebenfalls von Schuster arrangierten Besuch beim Führer eingeladen. Es war der Höhepunkt von Kuhns Karriere.“【ここにいう Schuster については、小稿注の 2 を参照。】
- 20 Susan Canedy Clark : 上掲書の p.114. ニューヨーク市マンハッタン地区の 6 番街 756 番地にあったヒッポドロウム会館 (*Hippodrome Halle*) は、1905 年 4 月から 1939 年 6 月に解体されるまで使用された客席数 5140 を有す大規模な多目的ホール。1939 年 1 月には「ヒトラー政権」に反対する大規模集会もこの会館で開催された。
- 21 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.42.
- 22 Marvin D. Miller: 上掲書の p.173.
- 23 Marvin D. Miller: 上掲書の p.173. Carl A. Sokoll: 上掲書の p.40 によれば、ドイツ語の使用は義務づけられたものの、実際には英語も使用されたようである。これはドイツ系アメリカ人子弟だけでなく、GAV の活動に同調したイタリア系アメリカ人やアイルランド系アメリカ人がおり、すべての子弟がドイツ語を理解できるとは限らなかったためであろう。
- 24 Carl A. Sokoll: 上掲書の P145.
- 25 Deutsches Volksecho NY. Patrorius Publsing.den 2. Okt., S.1.1937.
- 26 James E(dward) Geels: 上掲書の p.78.
- 27 1939 年 4 月 21 日もニューヨーク市ブロンクス *Bronx* 地区のエプリング *Ebling* のカジノ競技場で、約 800 人ほどの人びとが参加しナチス総統の誕生を祝す集会が開かれた。因みにすでに、1933 年 10 月 26 日にはシカゴで「ツェッペリン・デー *Zeppelin Day*」という名の大集会が開催され、またロサンゼルス管区でも GAV の集会はラクレセント *La Crescenta* のヒンデンブルク公園 *Hindenburg Park* で頻繁に開催されていた。
- 28 図版出処:Georgetown Book Shop 社複製【合衆国初代大統領ワシントンの 207 年目の誕生日を祝し、1939 年に「アメリカ精神」の高揚目的で GAV が配布した掲示用ポスター。実寸はタブロイド版、カラー印刷。
- 29 中写真出処: University of Southern California (Courtesy of University of Southern)、右写真出処: [www.germanamericanbund.org/pages/MADISON\\_SQ\\_GARDEN\\_1939\\_jpg.htm](http://www.germanamericanbund.org/pages/MADISON_SQ_GARDEN_1939_jpg.htm)
- 30 北ドイツニーダーザクセン州のヘルムシュテット *Helmstedt* に生まれ、27 歳の 1889 年にアメリカに移民。フィラデルフィア市内のルター派教会で司牧助手を務めたあと、ニュージャージー州のエッグ・ハーバー *Egg Harbor* に牧師として赴任、以後ハリスバーグ、バファロー、など各地に勤務。1930 年にフィラデルフィア市内のセント・ポール教会で 1930 年の退任まで勤務、その後は著作活動を続けた。
- 31 Carl A. Sokoll: 上掲書の p 157. と p.182.
- 32 注の 19 参照。
- 33 Carl A. Sokoll: 上掲書の p.183 の注 1.
- 34 この「反ドイツ感情」については、拙稿:『ドイツ文化敬愛から反ドイツ感情への変容 —第一世界大戦前

- 後のドイツ系アメリカ人をめぐって―』・「国際文化研究科論集」、東北大学大学院国際文化研究科、第22号・2014年を参照されたい。
- 35 Marvin D.Miller: 上掲書の p.95, James E(dward) Geels: 上掲書の p.142. ならびに Susan Canedy Clark: 上掲書の p.166.
- 36 Marvin D.Miller: 上掲書の p.244 には、テキサス州のサン・アントニオ *San Antonio* 南西に位置するクリスタル・シティー *Crystal City* 収容所でクーンがドイツ語教師を務めたとあるが、詳細な日時は記されていない。Susan Canedy Clark: 上掲書の p.191., James E.Geels: 上掲書の p.151.
- 37 James E.Geels: 上掲書の p.153.
- 38 このクンツェに関してはニュージャージー州のカムデン *Camden* に生まれたこと以外、詳細は不明。
- 39 Marvin D.Miller: 上掲書の p.217.
- 40 昔は図書館と談話室付の公衆浴場と大ホールを有す建物として地区住民の利用されていた。大規模な改造後、現在は芸術家や演奏家のための多目的会館として用いられている。
- 41 Marvin D.Miller: 上掲書の P.254.
- 42 トーマス・マンの日記 Hg.v. Peter de Mendelssohn: *Thomas Mann. Tagebücher 1937-1939. Frankfurt a.M.: S.Fischer. 1980., S.779* の注釈によれば、1941年8月にシカゴで最後の集会が開催された。アメリカ合衆国のドイツに対する宣戦布告はこの「民族同盟」【小稿でいう GAV のこと】の崩壊と指導層の収容所収監へと繋がっていった、と記されている。
- 43 これは「アメリカ・ユダヤ人協議会 *The American Jewish Congress*」が開催を呼びかけ、同協議会議長で聖職者のシュテファン・ウィーズ (Rabbi Stephen Wies:1874-1949) やニューヨーク市長フィオレロ・H・ラガーディア (Fiorello Henry LaGuardia:1882-1947) 等によるナチス糾弾演説が行われ、これを契機に同年5月7日には、社会的に影響力を有す資産家やユダヤ系の人々の音頭により、全ドイツ製品に対する不買運動が始まり、さらに5月10日にはニューヨーク市内で大規模な「反ナチデモ」が起きたのであった。この5月10日の夜はドイツ帝国内各地で忌まわしき「焚書 *Autodafé*」が行われた日でもあった。
- 44 1930年から1933までは社会主義党系のドイツ帝国議員であったがヒトラー政権樹立後、議員資格はく奪、その後オラーニエンブルグ強制収容所 (KZ Oranienburg) に収監、脱獄に成功しプラハへ逃亡を経て、1934年秋にアメリカへ亡命。
- 45 ケムニッツ *Chemnitz* にユダヤ系ドイツ人の商人の息子として生まれ、ユダヤ系学士会の奨学金を得て1935年にシカゴ大学に留学、翌年ハインリヒ・ハイネの『アッタ・トロル *Atta Troll*』に関する修士論文を提出、その後1937年~1939年までニューヨークで反ファシズムを表明するドイツ語週刊紙『ドイツの響き *Deutsches Volksecho*』の編集主幹として活躍。1943年アメリカ市民権取得。陸軍広報官として1944年6月6日の「ノルマンディー上陸作戦」にも参加。1953年に旧東独 (ドイツ民主共和国) に帰還、著述家として活躍しながら1990年の東西ドイツ統一後は政治活動に積極的に参加2004年、保養中のイスラエル「死海」で心筋梗塞により死亡。
- 46 *Deutsches Volksecho (Elektronisches Ressource): das Blatt für die deutsch-amerikanische Familie; die freie deutschamerikanische Wochenzeitung. 1937.New York.NY..Digitalisierte Ausgaben zum 16.10.1937* (<http://zefys.staatsbibliothek-berlin.de/list/title/zdb/27195491>).
- 47 <http://www.stiftung-bg.de/kz-oranienburg/index.php?id=453> より。
- 48 ニューヨーク時代 (1945年) 頃のシュテファン・ハイム。出処 <http://www.stefan-heym.de/biografie.html>
- 49 ニューヨーク市本部を置く *Leo Baeck Institute* のウェブサイトにある Hannah Loewenberg-Harnest 氏の *An Intellectual Resistance* 【<https://www.lbi.org/2013/11/intellectual-resistance/>】より。
- 50 1937年2月27日版 *Deutsches Volksecho* 紙第6面下の広告。上注46参照: *Digitalisierte Ausgaben zum 27.02.1937* より。
- 51 紙幅の都合で取り上げないが、*Illustrierte Zeitung. Leipzig:J.J.Weber, Nr.4633. 181Bd. 28.Dez.1933., S.783* には1933年12月6に、記念式典会場のマディソン・スクウェアガーデンを埋め尽くした列席者の写真が掲載されている。
- 52 *Cornelia Wilhelm:Bewegung oder Verein? Nationalsozialistische Volkstumspolitik in den USA. Stuttgart:Franz Steiner, 1998.S,101,Anm.46*. ドイツ名は *Anti-Nazi-Bund Hollywood zur Verteidigung der amerikanischen Demokratie* なお、*Jan-Christopher Horak:Anti-Nazi-Filme der deutschsprachigen Emigration von Hollywood. Phil.Diss. Münster 1984* は入

手不可能で未読。

- 53 Hans C. Blumenberg : Kino zwischen Profit und Propaganda. In: DIE ZEIT, 14.01.1977 (Nr. 04).
- 54 Susan Canedy Clark : 上掲書、p 187. ならびに Richard Goldstein: 上掲書、P.209. このニューヨーク市で封切られた映画については、ワシントンのドイツ大使館が、映画の製作中にロサンゼルスと同国領事館を通じ、製作会社に製作中止を再三申し入れたが、抵抗が強くこれが聞き入れられることはなかった。
- 55 この1940年10月に封切りされた映画について、アメリカ亡命中のトーマス・マンはアグネス・マイヤー (Agnes Ernst Meyer: 1887-1970) に宛てた手紙の中で「私たちはチャプリンのやや控えめなそれでも部分的には大変に滑稽な Wir haben Chaplins etwas schwache, aber teilweise eben doch sehr komische Diktatoren-Travestie gesehen (…)」と記している。【Thomas Mann : Briefe 1937-1947. (Hg.v.Erika Mann) : S.Fischer Verlag: 1963.p.168.】
- 56 ウォルト・ディズニー (Walt (er) Elias Disney:1901-1966) は、母方にドイツ系の血を引き、ドイツ風にはヴァルター・ディストラー *Walter Distler* であるとの風説が問題となったことがある。Carsten Laqua: *Wie Micky unter die Nazi fiel. Walt Disney und Deutschland.*, Hamburg, Rowohlt, 1992., S.101. またアメリカがドイツに宣戦布告する前まで、ディズニーの漫画や映画自体は決して悪評もなく *Micky Maus Zeitung* 『ミッキーマウス新聞』は1937年9月末まで発刊されていた。
- 57 この8分ほどの短編映画部門でオスカー賞受賞のアニメ映画は、最初は『ナチの国のドナルド・ダック』という名であった。だがオリヴァー・ウォーレス (Oliver Wallace: 1887-1963) が『総統の顔 *Der Fuehrer's Face*』という主題歌を、この映画の完成直前に出していたため、急遽この歌の名を映画名に変更した。
- 58 University of Southern California の、The Norman Lear Center のサイト 【<https://learcenter.org/pdf/WWRoss.pdf>】にある Steven J.Roy の映画解説に用いられている映画ポスター図版を借用。
- 59 「ハイフォン付アメリカ人」の問題は極めて複雑であるが、こと第26代大統領 S・ルーズベルトが、問題としたのは、アメリカ合衆国は確かに「移民」によって成り立つ国家ではあるが、「真のアメリカ」をもしも全アメリカ市民 (国民) が望むならば、German-Americans, Irish-Americans、などのようにその民族名の後にハイフォンを付加し、個々の民族を際立たせるべきではない、という趣旨であった。このハイフォンの個所を「〇〇系」の「系」という感じでは表現しきれない翻訳上の意味がここには含まれており、これは別稿で論じる必要がある。
- 60 S.ハイム編集の『ドイツの響き *Deutsches Volksecho*』(1938年2月12日付第3面) 紙の記事「セントルイスにおけるドイツ文化連盟会議 *Tagung des deutschen Kulturverbandes in St.Louis*」には、同時点で GAV 団員数を75,000 だとしている。
- 61 親友リンカーン大統領の下では、連邦の陸軍将官として名をあげ、第19第のヘイズ (Rutherford Birchard Hayes) 大統領時代 (1877-1881)、ドイツ系アメリカ人として初の國務長官を務めたカール・シュルツ (Carl Schurz: 1829-1906) を顕彰し、1929年に組織された財団。この財団はフィラデルフィアに居を構え、多くのドイツ系アメリカ人実業家の支援により、各種の講演会を行う他、1934年には *American-German-Review* を発行、この機関紙は1938年には年4回の季刊誌となった。
- 62 ニューヨーク市にあるコロンビア大学にドイツ語教育を通じてアメリカとドイツ語圏の国々の文化理解を目的に参集した中・高等学校と大学でドイツ語の教鞭を取る人々により1926年結成。1928年からは現在も続く季刊誌 *The German Quarterly* を発行。